



# 白桜小だより

平成 29 年度 11 月号  
中野区立白桜小学校  
校長 宇賀神 佳子  
平成 29 年 11 月 1 日発行

## 「特別の教科 道徳」(道徳科)について

校長 宇賀神 佳子

道徳科の授業は平成30年度から、教科書を用いての教科となり、学期末には記述式での評価も出ます。この動向は報道でも取り上げられていますが、その本質的なことを伝えているかといえば、十分でないように思います。「なぜ『特別の教科 道徳』となるのか」、授業内容から考えてみます。

道徳科に「6セント半のおつり」という教材があります。これは若き日のリンカーンの話です。当時はエイブと呼ばれていました。その概要をかいつまんで紹介します。

今から 200 年前、アメリカのミシシッピ川近くの田舎町には家がたった 15 軒しかなく、ここに住む人も 100 人くらいしかいませんでした。エイブは当時、オフエットさんの店で働いていましたが、この店は、砂糖、塩、鎌、鋏、帽子、靴、服など何でも扱っていて、近くの農家の人たちが必要なものを買っていました。

ある日、店を閉めようと番頭さんが売り上げを計算していると、6セント半が余ってしまうことが分かりました。それを聞いたエイブは、自分がおつりを間違えたことに気がきました。布地をたくさん買った女性客に渡したおつりが少なすぎたのです。

「大事なお客様だ。今日の内に返してこよう。」そう言ってエイブは冷たい風の吹く夜道を歩きだしました。その女性の家は 10 キロも離れていました。着くまでにたっぷり 2 時間はかかります。

「こんばんは。あのう実はおつりを間違えたのですが……。差し上げるおつりが 6 セント半少なすぎたのです。ここに持ってきました。」

そうやってエイブは、ポケットの中からお金を出しました。女性は、ひどく驚いた様子で何度もエイブを見上げました。6セント半といったら、今の日本のお金に直すと 6 円ほどなのです。

「あれまあ、それだけのことで、こんな寒い晩、ここまで来て下さったのですか。」

エイブは、にっこり笑って、

「すみませんでした。この次は気を付けますから、どうぞよろしく。」

そう言うと、夜更けの道を、真っ直ぐ帰っていきました。

(文部科学省発行「わたしたちの道徳」小学校 3・4 年生 より 抜粋)

これは 3 年生で扱うことの多い教材ですが、道徳科の授業では、こうした教材を基に子供たちが話し合いをします。導入に続く展開前半では、「どんな気持ちから、エイブは間違えたおつりを返しに行こうと思ったのでしょうか。」等、子供たちは自分の気持ちや経験をエイブに投影させて、エイブの心情や彼がとった行動について考えます。学級の子供たちから出る意見は、彼らのこれまでの経験やご家庭での価値観により実に多様です。特に、エイブが置かれた状況で、「おつりを返しに行く」という判断をするかどうかは、人により異なるでしょう。6円という金額をどうとらえるか、寒い風が吹く 2 時間かかる 10 キロという道のりをどう考えるか、どの判断にも、その理由にもそれぞれ納得できます。また、別の日に女性が来店したときに返金するという方法もあるでしょう。「正直に生きる」のは大切なことと分かってはいても、その時の環境、おかれた状況から、また「いいや」と思ってしまう弱い気持ちからできないこともあります。人間はいつも強いばかりではないのです。

(裏面に続く)

実は、この点が道徳科の授業にとってはまさに重要なところです。「正直」という言葉の意味は、辞書を引けば分かりますし、生活の中で問われたら「分かっている」と返されるかもしれません。しかし、子供たちの経験が生かされると「正直に生きる」一つでも、本当に多様な見方・考え方ができますし、状況や環境等諸条件によっても大きく異なります。ここに「人間なるもの」の理解が必要となります。教材を基に考え、話合うという活動を通して、子供たちは「正直」という道徳的価値を多面的・多角的に見ることができ、理解していきます。また友達の様々な体験や意見に触れて、他者を理解したり、人間を理解したりしていきます。

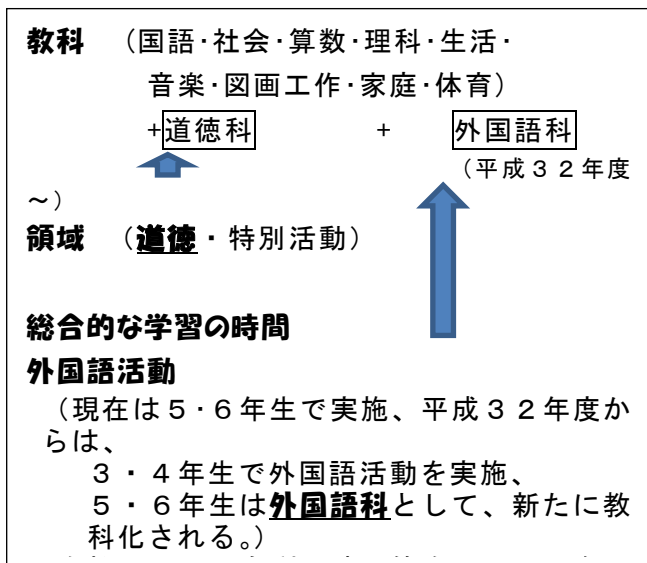


4年生の授業「絵はがきと切手」

さらに展開の後半では、「正直」という観点から、自分の生活や行動について振り返ってみます。「正直」に言えたこと、言えなかったこと、子供たちの経験には、時にうまくできなかったこともたくさんあるかと思えます。しかし、一度立ち止まり、道徳的価値に照らして自分の姿を見つめることで、子供たちは、「次は『正直』に生きることもやってみよう」と自己の課題をもつのです。

こうした授業の展開には、子供たちのこれまでの経験や物の見方、道徳的価値の理解が重要です。そこから自分の生活や今後の生き方について考えさせる点で、正解を追究する教科とは違うのです。

道徳科の学習では教科書を使用しますが、これまで使用した副読本とはどこが違うのでしょうか。まず、今回の改訂で道徳の授業は、教育課程上、特別活動などの「領域」から「教科」となります。



平成30年度における 学習指導要領のイメージ

「教科」になると教科書を使用します。「教科」は、全国的な教育水準の維持向上を図るため、文部科学省が検定した教科書の使用が義務付けられています。教科書は、教育課程を編成する際の基準として示される学習指導要領に基づき編集されており、各学校は教科書を中心に指導計画を作成し、教員の創意工夫を重ねながら指導を進めます。

一方副読本は、学習の補助教材として使用され、発行会社により内容に開きがある場合があります。このため、授業により一部の教材を「わたしたちの道徳」など、文部科学省発行の教材集に差し替えて使用することもあります。中野区では、これまで副読本を公費により購入していただいていたのですが、自治体の中にはこうした副読本を購入せず、私費負担にするところもあります。「教科」にすることで、全国に教材が行き渡るのです。

「道徳科」の評価に関して、ご説明します。

「道徳科」の授業は、内容項目に従って年間指導計画が立てられ、意図的計画的に進められます。内容項目には、「信頼・友情」「役割と責任」など、ねらいとする道徳的価値が含まれ、低学年19項目、中学年20項目、高学年22項目あります。今回の改訂では低学年から中・高学年、中学校までの内容が体系化され、キーワードでも示されることになりました。

- A；主として自分自身に関すること、
- B；主として人との関わりに関すること
- C；主として集団や社会との関わりに関すること
- D；主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること



文部科学省発行「わたしたちの道徳」教材としても活用できるよさがある

「特別の教科 道徳（道徳科）」の内容項目一覧

	A 自分自身に関する こと	B 人との関わり に関すること	C 社会や集団との関わり に関すること	D 生命や自然、崇高なも のとの関わりに関する こと	項 目 数
低 学 年	善悪の判断、自律、 自由と責任 正直、誠実 節度、節制 個性の伸長 希望と勇気、努力と 強い意志	親切、思いやり 感謝 礼儀 友情、信頼	規則の尊重 公正、公平、社会正義 勤労、公共の精神 家族愛、家庭生活の充実 よりよい学校生活 集団生活の充実 伝統や文化の尊重 国や郷土を愛する態度 国際理解、国際親善	生命の尊さ 自然愛護 感動、畏敬の念	19
中 学 年	善悪の判断、自律、 自由と責任 正直、誠実 節度、節制 個性の伸長 希望と勇気、努力と 強い意志	親切、思いやり 感謝 礼儀 友情、信頼 相互理解、寛容	規則の尊重 公正、公平、社会正義 勤労、公共の精神 家族愛、家庭生活の充実 よりよい学校生活 集団生活の充実 伝統や文化の尊重 国や郷土を愛する態度 国際理解、国際親善	生命の尊さ 自然愛護 感動、畏敬の念	20
高 学 年	善悪の判断、自律、 自由と責任 正直、誠実 節度、節制 個性の伸長 希望と勇気、努力と 強い意志 真理の探究	親切、思いやり 感謝 礼儀 友情、信頼 相互理解、寛容	規則の尊重 公正、公平、社会正義 勤労、公共の精神 家族愛、家庭生活の充実 よりよい学校生活 集団生活の充実 伝統や文化の尊重 国や郷土を愛する態度 国際理解、国際親善	生命の尊さ 自然愛護 感動、畏敬の念 よりよく生きる喜び	22

この内容項目に従い、年間36時間の道徳科の授業が実施されます。(1年生は35時間)内容項目数は、各学年とも年間指導時間の36以下ですから、例えば高学年は36時間－22項目＝6となり、6時間分は学校経営の重点に従って重複して扱います。白桜であれば、「自律する力」「協働する力」「参画する力」の育成に関わる内容項目を重点化し、複数の時間で扱うこととなります。

道徳科の授業において、ねらいとする道徳的価値の理解を基に、子供たちは自己を見つめ、物事を幅広い視野から、多面的・多角的に考え、人間としての生き方を深める学習を重ねていきます。

このため、子供たちに何を考えさせるのかを明確にした授業を教師が行い、道徳科の学習で子供たちがねらいとする道徳的価値について、「どのように多角的・多面的に考え、意見交換を通して理解を深め、自己を見つめ、自分の生き方につなげていこうとしているのか」、また「これまで抱いていた見方・考え方が、道徳科の学習を通してどのように成長してきているのか」という点が道徳科の評価では大変重要になります。こうした考えに基づき、子供たちの学習の取組状況と合わせて、学期や1年間という大きなまとまりの中での成長の様子を、教師が丁寧に見取り、「あゆみ」の欄に記述していきます。子供たち一人一人の成長を積極的に認め、励ます評価なので、他の子供と比較をしたり、A、B、C等到達度を表す数値で評価したりすることは、道徳科の評価ではありません。また、普段の学校生活で見られる姿は、これまで通り「行動の記録」で表していきます。

教科化の背景には、「いじめの問題」など、「子供の心の育ち」に関する深刻な課題があります。

繰り返しますが、道徳科は「こうしなければならない」という決意を強いる時間ではないのです。なぜ教科となるのか、評価まで行うのか、ひとえに子供たちに、自分の生き方を考える時間を得て、自分らしさやよさを発揮しながら生きていってほしい、という願いに基づいているのです。道徳科の授業の基盤には、ご家庭での考え方や価値観があります。道徳科の授業で扱った教材について、ぜひご家庭でも話題にさせていただき、「子供たちがよりよく生きてほしい」という願いの下、学校と保護者・地域の方々とが連携していきたいと切に願っています。